

同窓会

ニュース・レター

第4号

大阪大学
文学部
文学研究科
同窓会

2005年3月20日発行



教育支援室は、文学部本館1階の旧合同研究室分室を全面的に改装し平成16年度より開設、学生の学習支援、就職支援などの業務に当たっています。同時に旧合同研究室も研究推進室、学生自習室(写真左下)として装いを新たにしています。

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部・文学研究科同窓会

URL

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

E-mail

dousou78@let.osaka-u.ac.jp

研究科長あいさつ

文学研究科長 柏木 隆雄

待兼山の今

指折つて数えてみると文学部を卒業して三十六年になる。入学して四十年ということか。阪大坂と称する阪大下交差点から昔テニスコートがあった庭園入り口まで長く蛇行する坂道は、雨の日など泥濘ぬかるんで、じつに厭いやなものだったが、舗装されて多少は歩きやすくなった。左の医療短大のあととは少し塗装し直され、生涯教育センターといった形で地域との交流の拠点にしようかと計画されている。イ号館は豊中キャンパスのシンボルということで数年前に補修改装され、ビュックの外壁に青の窓枠が異彩を放った。しかしたちまち風雨にさらされて、早くたびれた感じがする。けれども中に入れば、昔と変わらない階段に講堂があつて、オープン・キャンパスの時など受験生を前に、この講堂で旧制浪速高校の秀才たちが入学式に整列したところだと話すときと感動した面もちをする。一階は現在博物館の準備室になっていて、博物館の建物ができるまで、マチネワ二を展示したり、蔵品を収納管理している。母校訪問のついでに、ちょっと覗いてみられたらどうだろう。

白鳥しらとりが番で並んで泳いでいた一番奥の池は埋め立てられ、随分長い間ベンベン草の生えるままにされていたが、いまガラス張りの新しい学生の同好会室や池に面する洒落た食堂の建物がもうすぐ竣工する。綺麗なのができるよ、と一緒に歩いてきた学生に言くと、文学部の建物の方を綺麗にしてよ、と口をとんがらせた。なるほどわが文学部はすでに築後五十年に垂たなんとする。けれども今年玄関口ビーを改装して、新しく懷徳堂の復元模型（大正期のもの）を設置して、明るく、洒落た意匠で学生や同窓生、来客を迎える予定だ。

是非待兼山を訪れて、新旧こもこもの竹まいに往事を偲んでいただきたい。



—プロフィール—

昭和19年生。昭和44年大阪大学文学研究科仏文学専攻卒業。神戸女学院大学文学部助教授を経て現在本学文学研究科教授。著書『謎とき「人間喜劇」』（ちくま学芸文庫）、「評伝ジュール・ルナール」（臨川選書）など。

新鮮な発想を象牙の塔に

～教育支援室紹介～

教育

支援室

大阪大学文学研究科の本館の玄関

左手に、新しく教育支援室という部屋ができました。この名前を初めて耳にする方も多いと思います。教育支援室は、文学部や文学研究科の学生の学習に関わる多様な活動をサポートし、その環境を整備するために設立されました。教務係とともに、学生の学習相談、奨学金や就職などに関する情報提供などをを行っています。二〇〇四年十一月に誕生したばかりなので、満足のいくサービスを提供することはまだまだできませんが、学生や教員の要望に応えて、今後とも就職情報の収集や学習環境の改善などに取組んでいくつもりです。すでに卒業された同窓生の皆さんにも、就職活動などに関して、今後協力をお願いすることもあろうと思います。そのときはどうかご支援をお願いいたします。学生に対する支援活動は、学部・研究科としては、正直に言って、これまであまり取り組んでいなかった分野です。社会に出られた同窓生の皆さんにも、

いろいろなアドヴァイスをいただき、今後の発展に役立てたいと考えています。

教育支援室では教育支援室の活動の一端としてホームページも開設しています。一度アクセスしてみてください（<http://www.let.osaka-u.ac.jp/kyoushi/>）。文学部や文学研究科の様々な情報を、インターネットを通じて入手できるようにするつもりです。例えば、オフィスアワーの表示を行い、シラバスの電子化にも取り組んでいます。同窓生の皆さんからの、ホームページに関する提言もお待ちしています。限られた予算ですが、できることから実現していきます。こういう問題があるからできない、こういう障害があるからできないという発想ではなく、こういう課題を実現するには、こういうアイデアがあるぞというような姿勢で進みたいと思っています。同窓生の皆さん、新鮮な発想を象牙の塔に送り込んでください。社会からの提言をお待ちしています。

（教育支援室 副室長 藤川 隆男）



退職なさる先生方から

◆思い出を語る

考古学教授 都出比呂志

京都大学、滋賀大学、大阪大学の三つの大学で働いた。一九七九年、大阪大学文学部国史研究室に迎えられたが、当時考古学講座がなかった。私の着任九年目に考古学研究室が開設した。開設に当たっては多くの方々の援助をうけた。講座数削減の政府の方針の中で、黒田先生を中心とする日本史の先生方の支援は、特に忘れることが出来ない。

二十四年間の、大阪大学在職中でどうしても忘れられないのは、考古学講座の開設と、くも膜下出血を患ったことである。五十七歳の時、くも膜下出血におそわれた。病にたおれてからの現在まで五年半は、苦闘の連続であった。文学部の先生には多大な迷惑をおかけした。学部長・評議員、事務職の方々には大変御世話になった。

特に考古学研究室の先生方には多大な負担を担って私を支えて頂き申しわけなかったと思うと同時に、心から感謝している。

大阪大学の考古学研究室は二〇〇五年で十五周年を迎える。考古学の卒業者は総計百五十七名で、大学院進学者、会社員、研究機関スタッフ、学芸員、教員、家事従事者などとして、



1942年大阪市に生まれる。1966年京都大学大学院文学研究科博士課程退学。京大文学部、滋賀大教育学部を経て1979年4月より大阪大学文学部。1988年考古学講座開設と同時に初代教授。1989年『日本農耕社会の成立過程』により文学博士。1989年第2回濱田青陵賞受賞。著書『雪野山古墳の研究』『王陵の考古学』（岩波書店）等。



どの分野でも大いに活躍している。考古学講座の開設以後調査した主な遺跡としては、南条古墳、長法寺南原古墳、鳥居前古墳、雪野山古墳、桜井谷窯跡群、稲荷塚古墳、昼飯大塚古墳、井ノ内稲荷塚古墳、今里大塚古墳、勝福寺古墳、篠窯跡群がある。『雪野山古墳の研究』で第六回雄山閣考古学特別賞を受けたことは励みになった。大阪大学文学研究科退職後は、比較考古学の方法論で弥生・古墳時代研究を深めたい。

毎週金曜日一日をあてた博物館や社寺での実地見学の授業が、もつとも強く記憶に残っています。助教教授の選考の際でしたか、日本の仏教美術についても指導できるようにとの注文があったということなので、武田先生との共同の授業でしたが、学生になったつもりで作品を熟視し、記述することに努めました。美術史の基礎訓練を受けたことのない私にとつて、この授業はきわめて勉強になりました。卒業生の皆さんとの思い出のほとんどが、あれこれと議論しながら作品に見入っていたこの授業に関することです。学生を育てることは何もしなかったのに、学生から教えてもらったことはいっぱいあり、皆さんに心から感謝しなければなりません。



1974年文学部助手、1976年講師、1979年助教授、1989年教授、2002年総合学術博物館に配置替、評議員、文学研究科長、総合学術博物館長を歴任。著書『美術に見る積尊の生涯』ほか。



一九七四年四月に木村重信、武田恒夫両教授が着任されて、国立大学には珍しい美学科がスタートし、私は翌月に助手に採用されました。美術史が二講座もあったから、インド美術史のようなマイナーな分野を専攻していても採用してもらえたのでした。その後三十年余りも大阪大学に勤めることができたのも、まったく幸運の連続でありました。

定年までまだまだ年月があると思うていたら、あつという間のことでした。最後の五年間余りは、私がまったく苦手とする管理運営の役目を引き受けることになり、周囲の方々に支えられて何とか任期を過ぎたという思いです。特に総合学術博物館の設立にあたっては、美術史の定員二名を持ち出し、大変な痛手を与えました。文教予算の厳しい時期とはいえ、博物館新築のめどさえ立てることができず、文学部と美術史講座に償いをしないまま大学を去るのは、もつとも心苦しいことです。

◆金曜日の実地見学

総合学術博物館長
美術史学(兼任)教授 肥塚 隆

私の最近の仕事

福永 喜夫

私はいま朝日放送で二時間のミステリードラマ「土曜ワイド劇場」のプロデューサーをしています。卒論はディケンズで、彼は生涯けつこうミステリーに近い所に立っていました。そのため、私は阪大で学んだこととずいぶん近い所で仕事ができるという幸運に恵まれています。自宅も千里ですから、ほんとうに近い。まさに阪大はわが母校、故郷です。学部生にあがったときに年若い先輩の玉井先生(当時は助手)に巡り会ったことも幸運でした。三十年経った今もお世話になっています。

ところで、テレビドラマがどんなふうに行われるのか、興味をお持ちの方もいらっしゃると思いますので、一端を書いてみようと思います。といっても、与えられた字数ではとても詳述は無理ですので、簡単に。

ひとこと言えば、ドラマはジャンルを問わず本がすべてです。そして、必ずしも原作を必要としません。本は脚本家とプロデ

ューサーがブレインストーミングで作り上げるのです。現代をとらえて自分なりの解答をドラマにぶつける。それを脚本家が絶妙なセリフ、美しい言い回しでまとめられる。ツボにはまれれば凡百の小説より脚本の方がよほど泣けます。しかし、脚本だけではテレビドラマになりません。俳優、監督、スタッフがなければ一枚枚の絵にならない。脚本に肉体を持たせられるのは彼らなのです。そして彼らはしばしば文字で書かれた脚本から驚くべき魅力とパワーを引き出してきます。こんなにも美しい物語だったのか!たとえ殺人事件が起こって犯人がいなくてもです。

プロデューサーの仕事は、そのような一流のプロたちの力を企画に結集して作品を作ってもらうことです。そして、パートⅡもやりたいね、って言うってもらうことです。



福永 喜夫
昭和49年大阪大学文学部英文学専攻卒業。同年、朝日放送入社。現在、制作局テレビ制作部部長プロデューサー。

「最近の学生は・・・」

原田 一美

先日、大学時代の恩師である岡部健彦先生が亡くなられた。そのせいか、ここしばらく大学時代、とくに学部に進学してから「西洋史研究室」で過ごした日々(九年間)が思い出されてならない。

最近の研究室の様子はまったくわからないが、当時は一学年数人という小世帯だったせいもあって、研究室の人間関係は濃密で、またのんびりとしていた。国立大学が独法化された今、教員も院生も競争原理にさらされ、昔のようなのんびりとした雰囲気はなくなってしまったのだろうか。

独法化ならずとも、大学における教師と学生の関係、学生の意識、学生同士の関係などは時代と共に変化していくのが当然だとは思っている。だが、現在、教師になって学生とつき合っていると、これでもいいのだろうかと思うことも頻繁にある。「昔は・・・」とか「最近の学生(若者)は・・・」と考えるようになるのは、歳をとったせいなの

だろうか。そういえば、私が三十代後半になったころ、岡部先生に「先生、最近の学生は・・・」と言って、「きみもそんなことを言う歳になったのか」と笑われたことがあった。教師として、自分自身も十年前は「最近の学生」だったのだと自戒するようにならなければ・・・



原田 一美
1981年 大阪大学大学院文学研究科博士課程満期退学。
現在 大阪産業大学人間環境学部教員。
ドイツ現代史、とくにナチズムの研究に従事。



近況

卒業生

ニュース報道の現場で

横田 勇人

学生時代に憧れだったジャーナリズムの世界に入って、はや十七年になります。新聞記者としての振り出しは文化部でしたが、その後は整理部、英字新聞、レストラン経営誌、電子メディアと実に様々な経験をしました。この九年間は貫して国際報道に関わり、カイロ特派員としてパレスチナ紛争の現場取材する機会にも恵まれました。

赴任した九九年は和平機運が盛りあがっていた頃で、パレスチナ国家独立、パレスチナ問題の最終決着という歴史的出来事を任期中に現地から報じることになるものと思っていました。ところが、二〇〇〇年七月にキャンプ・デービッド和平交渉が決裂し、それからわずか二カ月で大規模な衝突が勃発。国際政治のダイナミズムに圧倒されました。その後の現地情勢の混乱は日本でも報道されている通りです。パレスチナ解放闘争のリーダーだったア



横田 勇人
1988年大阪大学文学部美学科音楽・演劇学専攻卒業。同年、日本経済新聞社入社。1999年から2002年までカイロ支局長。05年3月からテレビ東京へ出向し、報道局報道部配属。現在、夕方の報道番組「ニュースアイ」担当ディレクター。

ラファト議長死去を機に、パレスチナ情勢は再び和平モードへ戻りつつあるように見えます。しかし、最終解決へ向けた道のりはまだまだ遠いのが実情のようです。



二〇〇二年に帰国しましたが、取材現場での経験も踏まえて、昨年五月に集英社新書から『パレスチナ紛争史』という初めての著作を世に出すことが出来ました。今年三月からテレビへ出向し、新たな視点で報道の仕事に携わることになりました。今後も社内外で活動の場を広げていければと思っています。

あれもこれも願うことが大切！

山口佳代子(築山 桂)

博士課程の前期と後期、合わせて十年間大学院に通い、退学の際には指導教官に「うちのゼミで最長記録違うか」とのお言葉をいただきました。模範的な院生であればこれほど長く在籍する必要はないわけで、好きな勝手な研究生活を許してもらえたことを先には深く感謝しています。十年間の院生生活があったからこそ、私は今、十代の頃から望んでいた小説を書く仕事につけているのです。

学生時代には思うままに下宿で小説を書き散らしていた私ですが、大学院入学をきっかけに「今後は研究一筋」と誓いをたて、小説家の夢は諦める決意をしました。しかし、小説を書かない日々の空虚さに耐えられず、修士論文を書く頃には同時進行で投稿用の小説も執筆再開。以来、私の院生生活は常に研究が小説かどちらか一方にしばったほうが結果が出せるのではないかと悩むこともありました。「二兎を追う者は……」の諺が

頭から離れず、どちらを先に諦めるべきなのか悩む日々。「このまま両方芽が出なかつたら人生どうなるんだろう」と落ち込むことも。しかしあるとき、研究と小説どちらも諦められないなら二つを混ぜてみればどうだろう、と思いつきました。具体的には、「研究生活で身に付けた歴史知識をもとに時代小説を書いてみよう」というもの。それから七年。ようやく「駆け出しの時代小説家」と名乗れる場所にたどりつき、昨年には五冊目の著書となる『甲次郎浪華始末 蔵屋敷の遣い』を双葉文庫から出版。今年三月には続編の『甲次郎浪華始末 残照の渡し』が発売になります。今はさらに続編を執筆中。一方で研究分野での物書きもしげと続けています。ア

レもコレではなくコレもコレも願うことも大事。十年間の院生生活は私にそんな強さを身に付けさせてくれた気がします。



築山 桂(山口佳代子)
1969年生まれ。1992年大阪大学文学部日本史学科卒業。2002年同大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。著書に「浪華の翔風」【禁書売り 緒方洪庵・浪華の事件帳】「北前船始末 緒方洪庵・浪華の事件帳二」(鳥影社)【鴻池小町事件帳】(角川春樹事務所)【甲次郎浪華始末 蔵屋敷の遣い】【甲次郎浪華始末 残照の渡し】(双葉社)、共著に「番付で読む江戸時代」(柏書房)など。2005年げんてんふれあい福井財団芸術新人賞受賞。

◆ 日文学研究室のいま

一九七五年に大学院がスタートした日文学は、八八年に学部生にも開かれ、以後の組織変更を経て、日本語学、人文地理学と並ぶひとつの専門分野となっています。現在研究室には、六名の教員と、三名の院生・学部生等が所属しており、日文学棟三階の共同研究室やパソコンルームはいつも満員状態です。

今春二四号となる『日文学報』は、単なる論文集ではなく、『日文学方法論の会』という研究会報告を基にした特集、院生の公募論文、優秀な卒業論文、書評、「対話と方法」という批評コーナーなどを設けて、構成に工夫を重ねてきました。ちなみに新しい順に特集テーマを記せば、「近代家族論再考」、「古代」の表象、「越境の中の近現代日本」、「戦死者のゆくえ」、「反乱―鎮圧の系譜学」となっていて、外部からも多くの参加や寄稿をいただいています。

特徴ある演習をふたつ紹介しましょう。まず「日文学方法論演習」から。原則として水曜日の四限・五限に、全教員と博士前期課程を中心とした院生が参加するこの演習では、前週末までに報告者のデイスカッションペーパーがホームページにアップされます。参加者は、事前にそのペーパーを読むのが前提で、当日は、若干の補足説明のあと、コメントーターが口火を切つてすぐに討論となります。ひとり一時間で、二日三本が普通です。多面的な

角度から議論が展開しますので、報告者が論文を磨く場であるとともに、参加者が自分の研究上で新しい論点を発見する場でもあります。

また学部二回生向けの「日文学事始め演習」では、文献や資料の講読のほかに、フィールドワークや先輩が勤務する博物館の見学など、いろいろな企画を立案し実行しています。

このように、日文学研究室では、学際的な研究会、ワークショップ的で緊密な討論の場、そしてそれらの成果を発信する『日文学報』の刊行などを結びつけながら、研究教育に取り組んでいるところです。

(杉原 達)



兵庫県立歴史博物館への見学（「日文学事始めの演習」）

研究室今昔

◆ 哲学哲学史講座から哲学思想文化学専修へ

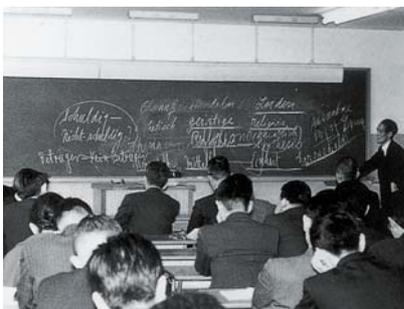


2005年2月、「ラジオ・メタフィジカ」の
開局セレモニーの後で（上野研究室にて）

その後、一九九〇年代の教養部解体と大学院重点化と二〇〇四年の法人化を経て現在、学部は哲学思想文化学という一専修にまとまり、大学院は哲学哲学史と現代思想文化学という二つの専門分野に分かれています。現在の（教官ではなく）教員は、哲学哲学史に上野修、入江幸男、舟場保之、吉永和伽、現代思想文化学に須藤修、中橋誠、溝口宏平（兼任）、望月太郎（兼任）です。この二年でスタッフが大幅に変わり、写真にもありますように、これまでの伝統に新しい頁を加えようと、新鮮な企画を色々と考えています。「アカデミズムの堅持」というモットーにも新しい意味づけが必要な気がします。ですが、このモットーを堅持していく所存です。哲学哲学史の同窓生の皆様からの助言や連絡を待っていますので、時にはふらりと研究室を訪ねてください。

(入江 幸男)

一九四八年の法文学部の発足時に哲学哲学史第一講座（フランス系）が生まれ、四九年に哲学哲学史第二講座（ドイツ系）が設けられて以来、「アカデミズムの堅持」をモットーに研究室が運営されてきました。一九七四年に私が学部に進学したころは、哲二に三輪正教授、哲二には高橋昭二教授がおられ、里見先生が助教授で阪大にいられたばかりでした。しばらくして哲二に山形先生が助教授で来られ、私の学生時代はその陣容のまま変わることなく、時間が非常にゆつくりと流れる中で、みんなじつくりと研究に打ち込んでいるという雰囲気でした。



伊達四郎教授最終講義
（文学部、1968（昭和43）年）

阪大フォーラム

「日本、もうひとつの顔」

ストラスブールにて



文学部が中心となって遂行している二十一世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」チームが、第四回目の阪大フォーラムを担当

することになり、昨年十一月五日～七日の三日間フランスのストラスブールで、「日本、もうひとつの顔」というテーマのもと日本文化の様々な相貌を披露し、のべ三百名のフランス人聴衆の好評を博しました。「阪大フォーラム」は大阪大学の研究成果を世界に向けて発信することを趣旨としたイベントで、今回はフランスとドイツの国境近くに位置する、アルザス地方の中心都市ストラスブールを開催地として選ぶことになりました。ここでは数百名の学生が日本語、日本文化を専攻

しており、ヨーロッパでも日本研究の拠点の一つでもあります。

約十名の阪大教員およびCOE研究員、フランスの日本研究者、そして日本の古典詩に造詣の深い著名な詩人ジャック・ルボー氏らによる二日間に行わたる講演会は、豊富な資料、映像、音響などを駆使しながら、墓や盆などの死の習俗、前衛演劇、漫画の言語・身体など、ステレオタイプ的なイメージとは異なる観点からの、興味深い講演と熱のこもった質疑応答が行われました。また三日目は四名のフランス人学生により、日本の文学・思想、言語・武術など多岐にわたる研究発表がなされ、阪大の教員および日本人留学生たちとの間で実りある議論が交わされました。異なる世代、異なる国籍、異なる専門領域の間のまさしく「インターフェイス」のフォーラムとなったことを関係者一同喜んでいます。

(和田 章男)



◆つかの間の四十年

—第十五期同期会 開催



道館」でのコンバのこと、クラス同人誌「化石木」のこと、若狭への旅のこと、ドイツ語のこと、その合間にふと、孫のこと、克服した病気のこと、年金のこと。四十年は、ほんのつかの間のようでもあり、またやっぱり長い重く長い年月であったことをしみじみ感じた半日でした。

(林 正則)

文学部第十五期生（昭和四十二年卒）の同期会が三月六日（日）中ノ島センターで開催されました。同期生七十名の内三十六名が出席、歓談の午後を過ごしました。今は還暦を過ぎたクラスメイトも互いに顔を見合わせた途端、四十年前の学生時代にタイム・スリップ。ピートルズ、ベトナム戦争、ケネディ暗殺、文化大革命、そしてカルティエエラタンから世界を巻き込んだ大学紛争へと、青春の滾りが世界を覆った時代でした。どの顔もいっきよに若やいで、恋愛を、実存を、反戦を熱く語っていた彼と彼女に、あつという間に逆戻り。旧「明



就職支援のお願い

文学部・文学研究科では、昨年四月に、学生・院生の学習や進路選択にかかわることがらを支援する教育支援室を発足させました。この教育支援室を構成する部門の一つに就職支援部門があり、現在、私はその責任者をしていきます。

「文学部が就職活動の支援をするのか」と驚かれた方も多いと思います。たしかに、かつて文学部といえば、世間一般の就職というものからも縁遠い学部でした。学生側も大学に就職支援など最初から期待せず、大学側も、就職支援といえはせいぜい求人票を掲示する程度のごとで、積極的な就職支援サービスの提供など、思いもよらぬことでした。

しかし、現在、文学部を卒業して一般企業に就職することは、ごく普通のことになっています。私が所属する日本史研究室の、ここ数年の卒業生の動向を見ても、一般企業就職者が圧倒的です。かつて、わが文学部学生の進路といえば、大学院進学か、高校・中学の教員か、あるいはマスコミ・出版社というのが相場でしたが、それはもはや過去の話です。

実は、このような変化は、もう二十年以上も前から起こっていたのですが、大学側の対応は旧態依然のままでした。しかし、わが文学部・文学研究科でも、遅まきながら現状を認識するようになり、就職支援部門の設置にいたったわけです。現在、教育支援室では、教台のパソコンを備え、求人情報の提供を行っているほか、就職関係図書を取り揃え、学生・院生の閲覧に供しています。また、学生部主催の就職ガイダンスとは別に、独自のガイダンスも行っています。

就職支援部門が発足して二年近くになりますが、つくづく思うのは卒業生の方々とつながりの重要性です。文学部同窓会には、卒業生の方から、ときおり求人情報が寄せられることがあります。これは学生・院生たちにとって、まことに有難いものです。私達は、このつながりをもっと深めていきたいと願っています。かつてと同じく、今もわが文学部・文学研究科では、卒業・修了後、各分野で活躍が期待される有能な人材が育っています。しかし、その能力を発揮する場を探しあぐねている学生・院生が多いというのが現状です。卒業生の皆様方の積極的な支援をお願いする次第です。

(教育支援室就職支援部門チーフ 村田 路人)

事務局便り

◆事務局の移転について

二〇〇四年度十一月に同窓会事務局は文学部本館「階」「教育支援室」内に移転しました。ぜひ一度お立ち寄りください。

◆名簿について

二〇〇二年度版『大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿』の購入をご希望の方は事務局までご連絡ください。同窓会会員に限り販価(四千元)十送料(二百九十円)でお送り

いたします。終身会費(二万円)をお支払いいただいた方には無料でお送りいたしますので、通信欄に名簿希望の旨、お書き添えください。数に限りがありますので、品切れの場合はご容赦ください。

終身会費のお支払い、名簿の代金振込みは下記の郵便振替口座にお願いいたします。

口座番号 0940179043
加入者名 大阪大学文学部同窓会事務局

●お願い

住所変更の際には、必ず同窓会事務局までご報ください。その際、名簿への住所、電話番号等の不記載を希望される方は、その旨お伝え頂ければ承ります。ご協力のごとくお願いいたします。

事務局への連絡はメールで、あるいはお手数ですが葉書にてお願いします。

●募集

◇「ニューズレター」の「卒業生の近況」への投稿を募集しております。写真一枚と六百字程度(原稿用紙枚半)の原稿を、事務局までお送りください。よろしく願います。

◇同窓会の名称を募集しております。採用者には図書券万円分を贈呈。

次のような名称が現在寄せられています。

- ・「待兼山・鰯の会」
- ・「待兼山・わいの会」
- ・「大阪大学待兼文学会」
- ・「待兼青山会」
- ・「待兼山青山会」
- ・「待兼文壇」
- ・「浪速にワニ会」
- ・「待兼会」
- ・「文待会」
- ・「待兼グラフィティ」

ご応募くださった皆様ありがとうございました。また新たな名称のご提案がありましたら、同窓会事務局までお知らせください。以上、皆様からのご応募お待ちしております。

●事務局メンバー

事務局長：林 正則(S四十二)
総務・服部 典之(S五十六)
会計：和田 章男(S五十五)
企画・立案：岸田 知子(S四十五)、志水紀代子(S四十一)、宮本 孝二(S四十八)
広報：入江 幸男(S五十二)、大西 愛(S四十一)
アルバイト職員：武内 正美(H十二)



石橋門から見たイ号館(総合学術博物館)と日本庭園

●住所：大阪大学文学部・文学研究科同窓会…豊中市待兼山町二番五号 TEL06-87532111
●ホームページアドレス…<http://www.letosaka-u.ac.jp/dousou/>
●事務局メールアドレス…dousou78@let.osaka-u.ac.jp